

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2017 AUTUMN



「大川ダム」

北陸地方建設局の第2号ダムである。
21,000KWのダム式発電所もあるが、大川ダムを
下池とした100万KWの揚水発電所がある。

絵 土田 和男

❖ 随想

玉田 和男(新潟市秋葉区)

成功したら返せ。失敗したときは俺の損だ。
心配するな

2

❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

小国に生きる 小国を活かす 峠でつながる

NPO法人 ここ掘れ和ん話ん探検隊
(山形県小国市)

12

❖ 特別企画

三条市の魅力を体感できる観光プログラムの開発
-インフラツーリズムで交流人口拡大を図る-
三条市 経済部 営業戦略室

4

❖ 北陸再発見

米粉のまち胎内でわいわい (新潟県胎内市)

14

❖ 特集「地域とともに」

アートと人が織りなす奥深い金沢を巡る旅
NPO法人 金沢クリエイティブツーリズム推進機構
(石川県金沢市)

8

❖ 伝言板

16

成功したら返せ。失敗したときは俺の損だ。心配するな



つちだ かずお
土田 和男

1935年新潟県秋葉区下新生まれ。同郷の「人間・本間 新作」に魅せられ、研究を続けている。近く「旧新関村下新の本間さま」を出版予定。加茂農林高校農業土木科卒。旧建設省退職後、北陸地方防災エキスパート、水防専門家として水防技術に関与。新関コミュニティ協議会「しんせき夢づくり塾」塾長。

1. 俳人契史 偉人新作

新潟ゆかりの地主、下新の本間家、中でも9代目当主の俳人契史、10代目当主の偉人新作の人柄を語れる人は今誰もいない。地域の歴史を次世代に引き継ぐ義務と責任を感じる。

下新の本間家は江戸から450年前にこの地に来てこの地を開拓している。新作は徳左衛門の姉（新潟本町に嫁ぐ）の3男として弘化2（1845）年生誕。後に徳左衛門の養子となる。新作は17歳で結婚（妻コト13歳）、18歳で家督を相続し、15人の子供をもうける。

養父徳左衛門は、白川、会津、村松藩の御用達を勤め、39歳で新作に家業を任せ、俳号を「古木庵契史」と号した著名な俳人としても活躍した。



ふるさつを見守る
本間 新作（筆者所蔵）

新作は「新潟県の実業界の父」とも言われ、新潟県の主な産業の創業にはほとんど参画し、実業家として天才的な才能と手腕を持っていた。

明治2年、政府の要請により、為替会社が東京など7都市と共に新潟にも設置され、新作はその頭取に就任している。

他に国立の第四銀行などの設立に関わっている。

また、県の農会の副会長を務め（会長は知事）農会からも功労賞が贈られ、翌年には藍綬褒章を受章している。

2. 本間新作に纏わる逸話

新作には多くの逸話が残っている。

この話を新潟地区老人クラブの「私の一言」で平成25年に筆者が話をした。

新作は先見性というか人を見る目が確かであった。従って新作によって世に出された人も多い。坂口仁一郎、中野貫一もそれにあたる。安吾の父、坂口仁一郎（五峯）は新作の後ろ盾があつて大政治家になった。

安吾の母親あきを仁一郎に世話したのも新作である。仁一郎は2度も東京に出るが2度共連れ戻され悶々としていた。

仁一郎（17歳）はよく新作（31歳）を訪ね、何かと相談していた。それが頻繁で毎日続いていた。

新作は、地租改正で現在の五泉市村松から新潟市秋葉区七日町までの土地調査を政府から依頼されていたが、仁一郎をこれに誘い二人で3年かけてまとめた。

また、新作は、仁一郎を「米穀取引所」の頭取代理にさせ、頭取と同じ金を支給した。

仁一郎は、郡、県の議員を経て、衆議院議員6期を務め、阿賀野川等の河川工事にも尽力した。また、文士としても「北越詩話」上下巻を発刊している。

石油王と言われた中野貫一は、新作に金を借りたりもしていた。資産も尽き、採掘権を手放さなければならなくなって夜逃げ寸前に新作に謝りに来た。新作は「これからの資金は俺が出す。もう一度死ぬ気で頑張れ」と言った。貫一は「出る見込みがないし、また失敗するかもしれない。これ以上迷惑を掛けられない」と言う。新作は『成功したら返せ。失敗したときは俺の損だ。心配するな』と言った。一度は言われてみたい、言ってみてみたい言葉である。その資金で最初に掘った井戸が大成功して、その後も次々と成功し「石油王」になったのである（貫一50歳、新作51歳）。

貫一は「下新の本間家は我が中野家の最大の恩人であることを子々孫々に伝えよ」と言って死んだ。

3. 本間新作の生きざま

本間家は、代々神社崇敬の念に厚く、神社境内地の寄進をはじめ、各方面の寄進も多い。

川に、水に泣かされた新作ではあったが、河川改修の仕事に参画し大河津分水、暴徒鎮撫ちんぶにあたり、水神社も建立している。

かくして川からの利を取り戻すことによって、本間家を立て直し、各方面の寄進を続けて来たものと思われる。一方政治活動も郡会議長、県会議員、村長を歴任し、文化面では新作の援助もあって、下新に「嘯月社しょうげつしゃ」（会員250名）を結社し、月刊「文海一珠」を発刊、会員には坂口五峯ぶんかいりょうせん、光井了縁かたもり（会津藩主松平容保の漢詩の師）。ちなみに筆者の曾祖父も会員であった。「文海一珠」は当代一級の漢詩人等大家の添削、批評を付して掲載するものであった。

18巻ほどしか続かなかったが、これは新関の宝だと言われている。

4. ふるさとを見守る本間新作

新潟新聞が誕生して140年、第1号新聞に新作の挨拶が掲載されている。新潟日報では「あすへ刻むふる里の記憶」（9月18日現在12回掲載）として平成29年4月3日から連載が生まれ、その第1回に「コメ、石油、鉄道の礎築く」、「政治経済地主が担う」として我が家にある新作の胸像の写真を載せて貰った。連載の第1回に新作とその思いに光を当てて貰ったことを筆者は非常に満足し光栄に思っている。第2回は「東蒲原郡本県に編入」で、第3回は「山本五十六戦死」として五十六が撃墜された航空機の左翼の写真が載った。戦争に最後まで反対しながらも連合艦隊司令長官として真珠湾攻撃を指導した「英雄」山本五十六の掲載された一連の記事に本間新作が登場しているのである。新関の誇りであり、下新の喜びでもある。

5. 上手な漢詩を美しい文字で書く先人

昔の人は何故俳句や和歌などが上手く文字も美しいのだろうといつも思っていた。

学校も行けず読み書きが出来ない時代なのに、今回本間さまの資料を研鑽しその側面を見た思いがする。それは限られた境遇の人々になるが、師弟関係の濃厚さの極みにあるようだ。大方の師弟関係は夫婦とか、親子とか祖父母とか叔父叔母など身内に生まれていることが多い。それも師弟の尊厳をお互いに大事にして大変な努力を積み重ねている。そんな尊い仕種に生まれていたことを学んだ。感謝したい。

結果的には本間さまは380年間の歴史的な夢のある地方創生を実施し、伝統を確立し、河川工事に参与してその全てを新潟に、新関に残し何も持たずに東京に戻られたのである。

眩しい偉さを見た思いがする。

6. 本間新作に光を当てたい

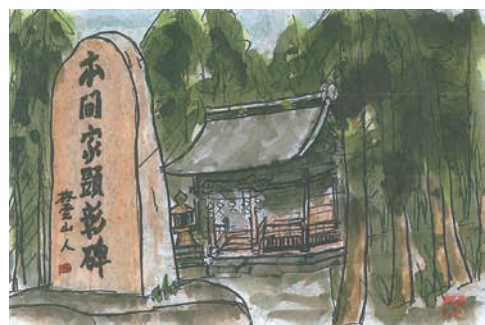
本間新作がおられた証は「本間家顕彰碑」と「本間家跡地碑」しかない。

元新潟市地域・魅力創造部政策調整監の望月迪洋氏が、本間新作のことを「このまま葬ってしまう事の無いように」と秋葉区役所の担当官に指示して頂いたことを感謝している。偉大さとむごたらしさと悔しさが交錯して目頭が潤む下新の本間さまである。

いずれ本間さまのご子孫にお会いしてそのことをお伝えしたい。



本間さまの大門。道幅は公道の2倍もあった。



本間家顕彰碑
下新神明宮境内(元新関村 村社)

三条市の魅力を体感できる観光プログラムの開発 —インフラツーリズムで交流人口拡大を図る—

三条市経済部 営業戦略室 中村 春菜

1. はじめに

三条市では、2015年度から2022年度を計画期間とし、少子高齢化、人口減少社会に適応しつつ、将来にわたって存在し続けていくことのできる力強いまちを築いていくための指針である「三条市総合計画」を2014年度に策定しました。

その中の人口動態改善の一つとして、三条市の魅力ある地域資源を活かした観光振興施策を充実させ、それを国内外に向け効果的、戦略的に発信することで更なる交流人口の拡大を図り、観光を産業として成り立つものとするとともに、関連する新たな事業の創出を促進することを謳っています。

その中の主要施策の一つとして、三条市の魅力を体感できる観光プログラムを開発し、ターゲットを明確にした効果的な情報発信を行うことで、交流人口の拡大を図ることとしています。自然環境等の地域資源を活用した体感型観光プログラムとして、「秘境八十里越体感バス」（以下「体感バス」）及び「笠堀ダム特別見学と大谷ダム探訪ツアー」（以下「ダムツアー」）を実施しています。

2. 体感バスの概要

(1) 八十里越

八十里越とは、新潟市から福島県いわき市に至る国道289号（総延長304.4km）のうち、三条市下田地域から福島県只見町に至る県境部分（延長20.8km）を指します。

実際は8里ですが、あまりの険しさゆえ1里が10里に感じられたことが八十里越という名称の由来です。

戊辰戦争の際、越後長岡藩河井継之助が傷を負った体で会津へ逃れるために、最後の力を振り絞って通ったことでも知られる歴史のある道です。

八十里越は、1989年から現在に至るまで国土交通省・新潟県・福島県が共同工事を進めて

います。県内有数の豪雪地帯のため一年のうち半年間（6月～11月）しか工事が行えず、地形が急峻なためトンネルや橋梁を施工しなければならないこと、工事用道路を作って工事を進めなければならないこと等から、長期間の工事となっています。

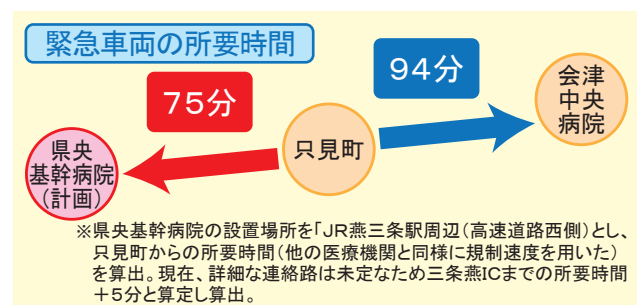


八十里越

(2) 開通へ高まる期待

国道289号は、新潟市から福島県いわき市に至る幹線道路で、新潟・福島両県はもとより、東北及び北陸地方の産業、経済、文化、観光において新たな交流を促進させる地域連携軸として、極めて重要な役割を担う路線ですが、八十里越が通行不能区間であるため、その役割を十分果たしているとはいえ、一日も早い全線開通が望まれています。

八十里越が開通すれば、安全性や信頼性が高い交通網が確保され、時間の短縮や大幅なコスト削減を図ることができます。例えば、現在、只見町には総合病院がないため、高度医療や救急医療の主な救急搬送先は、会津若松市にある会津中央病院となっています（所要時間94分）。八十里越の整備により、只見町から現在新潟県が設置を計画している県央基幹病院までの所要時間が75分となることで、新潟県の病院でも高度医療を受けることができるようになり、救命救急体制の向上が期待されます。



(3) 体感バスの目的

工事関係者だけしか入れない「通行不能区間」という固定概念を払拭し、富山県の「立山カルデラ砂防体験学習会」の事例を参考に、八十里越工事現場を活用し2013年度に体感バスをスタートしました。

主な目的としては、八十里越事業の必要性や目的を知ってもらい、福島県の近さを体感して



体感バス PR チラシ
(2016年度版)

もらうことで、早期開通に向けての気運を高めること、完成後では体感することができない土木技術の迫力や工事期間中では見ることができない自然景観など、非日常の特別感・満足感を観光資源に結びつけ、交流人口の拡大を図ることです。

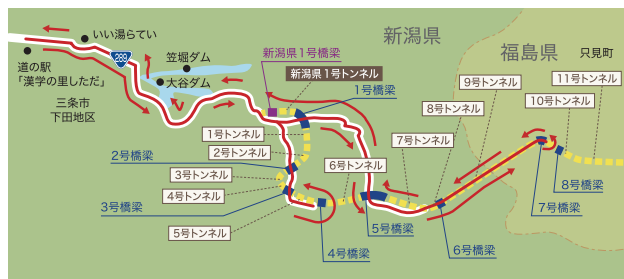
(4) 実施方法

運行期間は、積雪による影響のない6月～11月で、マイクロバスを利用した工事現場の見学会で、工事の現況、効果や必要性を説明してもらうため、国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所の全面的協力（先導及び工事説明等）を頂いています。

体感バスのルートについては、国道289号沿いの道の駅漢学の里しただを出発し、国道289号の通行止め区間の新潟県側ゲートに向かいます。ここからヘルメットを着用し、工事用道路に入ります。バスの中では、市民ガイドが八十里越の自然や歴史等について説明を行い、参加者を楽しませてくれます。

工事用道路は1号橋梁の下を通り、工事中の2号橋梁、3号橋梁を車窓から見学し、2013年度に完成した4号橋梁で下車します。ここでは、6号トンネルの工事現場とともに四季により表情を変える美しい渓谷、展望が楽しめます。来た道を引き返し、ぼた橋を過ぎ、三の滝隧道や外ノ沢橋、8号トンネルと進み、いよいよ

新潟県と福島県の県境越えとなります。9号トンネルは全長3,168mと八十里越の中で最も長く、ほぼ中央付近が県境です。9号トンネルを抜けると、7号橋梁の仮橋があり、標高は約650mと一番高く、7号橋梁の工事現場を見学した後、来た道を引き返し、5号橋梁付近で川面から100mを超える高さで建設される5号橋梁の説明を聞きます。ここからは、八十里越古道を確認することができ、新潟県と福島県の交流の歴史や、戊辰戦争時に河井継之助が会津若松に落ち延びる際にこの峠道を越えたこと等の説明があり、時空を超えたひとときを味わうことができます。その後、来た道を引き返し、新潟県側のゲートを抜け、道の駅漢学の里しただに到着するまでの3時間15分のコースです。



八十里越工事現場見学ルート

(5) 実施状況

2013年度は38回運行し、定員1,365人のところ参加者が1,351人、2014年度は33回運行し、定員2,688人のところ参加者が2,371人、2015年度は32回運行し、定員2,856人のところ参加者が1,561人、2016年度は18回運行し、定員1,512人のところ参加者が819人でした。

参加者は4年間で6,000人を超えています。参加者を地域別の割合で見ると、市内42%、市外54%、県外4%でした。



5号橋梁付近の見学



8号トンネル付近の見学

(6) 新たな取組（宿泊便の運行）

初年度は、運行開始直後から予想を超える反響があり、キャンセル待ちが300名に達したこ

ともありました。翌年は前年の実績を踏まえ、マイクロバスの台数を増やしたこともあり参加者が大幅に増加しました。しかし、3年目になると参加率が低下し、特に8月、9月の夏場は、参加率が25%と大きく落ち込みました。

そのため、昨年度は、8月、9月に八十里越を通り抜け、福島県只見町、檜枝岐村に宿泊する便を新たに運行しました。八十里越の効果、利便性をより実感でき、只見町の歴史や自然、食などの魅力を体感できる宿泊便は大好評をいただき、参加率は97%と大幅に増加しました。特に、全国的に知名度があり人気のある檜枝岐歌舞伎を鑑賞するコースは、定員に対し約3倍の申込みがありました。



只見町河井継之助記念館の見学



檜枝岐歌舞伎の鑑賞

(7) 今年度の取組

昨年度の実績を踏まえ、今年度は好評をいただいた宿泊便を増やし、新たにテーマを設定した特別宿泊便を運行しました。八十里越古道のトレッキング、河井継之助にまつわるゆかりの地巡り、ダムツアーとコラボしたコースなど多彩な内容とすることで、交流人口の拡大を図ってまいります。

3. ダムツアーの概要

(1) ダムツアーのはじまり

三条市では、平成16年と23年の二度にわたる大水害の教訓を生かし、災害に強いまちづくりを推進しており、市民が安心して安全に暮らせるよう、治水・利水の利便性を高め、貯水量を増やすため、2014年度から2017年度の間、新潟県による「笠堀ダムかさ上げ工事」が行われています。かさ上げ工事は、全国的にも非常に珍しく（全国2例目）、工事期間も2017年度までと限られたものであり、その間は一般車両は通行できない、まさに今しか見られない工事となっています。



ダムツアーPRチラシ
(2016年度版)

(2) 実施方法

運行期間は、体感バス同様、積雪による影響のない6月～11月で、工事の現況、効果や必要性、ダムの仕組みや働きを説明してもらうため、新潟県三条地域振興局の全面的協力を頂いています。

ダムツアーのルートについては、道の駅漢学の里しただを出発し、笠堀ダムに向かいます。現地では、ダムの管理棟の中で工事の説明を受け、監視システム等を見学します。笠堀ダムかさ上げ工事現場見学後は、大谷ダムに向かい、大谷ダムにあるふれあい資料館で水害の恐ろしさやダムの役割、仕組みの説明を受け、施設内を見学後、大谷ダム監査廊の内部を見学します。その後、来た道を引き返し、道の駅漢学の里しただに到着するまでの2時間30分のコースです。



笠堀ダム発電所からの見学



大谷ダム監査廊内部の見学

(3) 集客に向けた取組

全国各地に存在するダムマニアと呼ばれるダムファンが遠方からでも来たくするような仕掛けとして、新潟県と連携し、笠堀ダム、大谷ダムの公認ダムカードに加え、毎年デザインが変

「体感バス」同様、完成後には見学することができない工事現場など、非日常の特別感・満足感を観光資源に結びつけ、交流人口の拡大を図り、社会インフラの大切さ、防災への取組の重要性を理解してもらうため、2015年度にダムツアーをスタートしました。

わる「かさ上げ工事中」のオリジナルダムカードを参加者にプレゼントしています。

さらに、下田地域の道の駅や日帰り温泉施設と連携し、下田産の食材を使用したダムカレーを提供しています。ダムカレーには、オリジナルダムカードを付け、ダムツアー実施期間以外でも提供しており、ダムをきっかけに下田地域の魅力を体感してもらい、更なる集客を図っています。



笠堀ダムカレー

大谷ダムカレー

(4) 実施状況

2015年度は定員420人のところ参加者が381人、2016年度は定員588人のところ参加者が283人でした。参加者を地域別の割合でみると、市内22%、市外56%、県外22%でした。遠くは岐阜県、愛知県、滋賀県からの参加もありました。

(5) 今年度の取組

初年度は参加率が高かったが、昨年度は参加率が落ち込みました。今年度は、笠堀ダムかさ上げ工事が完了することに伴い、このダムツアーは最後となるため、今年限りの特別な見学だということ発信し、更なる集客の促進を図っています。

4. 地域における産業観光に対する取組の成果

下田地域の入込客数は、「体感バス」の運行が始まった2013年度は2012年度の394,407人から582,310人に増え、2014年度は556,668人、2015年度は607,965人、2016年度は590,903人と4年間で延べ230万人を超えました。

「体感バス」及び「ダムツアー」の集合場所となっている道の駅漢学の里ただは、2013年4月にリニューアルオープンしましたが、入込客数は2013年度が168,216人、2014年度は158,241人、2015年度は183,910人、2016年度

は181,550人と4年間で延べ69万人を超えています。

また、下田地域の日帰り温泉施設や飲食店など9施設と連携し、参加者限定の特別割引券を配付することで、周遊性を持たせました。割引券利用者は、2015年度が942人、2016年度が757人でした。

「体感バス」及び「ダムツアー」の運行は、交流人口を拡大させ、下田地域の入込客数や各施設の売上増への波及につながっています。



参加者限定割引券

5. 今後の産業観光推進の方向性と展望

企業のみならず、自治体さえもが消滅しうると言われる昨今、あらゆる角度からアプローチし、地域の魅力を発信し続けていくことが必要であることは、意識として共有されてきています。

一方で、産業、経済、文化及び観光において、新たな交流促進をさせるためにもインフラ整備を産業観光に結びつけることが重要です。

八十里越や笠堀ダム、大谷ダムを三条市の一観光資源とするため、下田地域の豊かな自然などの地域資源を活かした様々なイベントや体感プログラムを企画・実施することで観光客の満足度を向上させ、交流人口の拡大を図っていくとともに、下田地域の温泉施設や飲食店などの各施設と連携し、地域経済の活性化につながる取組を進めていきたいと考えています。ぜひツアーにご参加ください。

参考文献

- 1) 国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所：
国道289号八十里越「八十里越を翔る」

特集「地域とともに」

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、(社)北陸建設弘済会時代の平成7年から、公益事業として「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業制度を創設し、地域活性化に成果が期待できる事業を募集・採択し支援しています。

今回は第20回、21回事業で助成したNPO法人金沢クリエイティブツーリズム推進機構の活動を紹介します。

アートと人が織りなす奥深い金沢を巡る旅

NPO 法人金沢クリエイティブツーリズム推進機構 (石川県金沢市)

「ガイドブックには載っていない、秘密のツアーを体験しよう！」と銘打ったNPO法人金沢クリエイティブツーリズム推進機構(クリツー)が企画・運営する週末定期開催ツアーが、この7月にスタートした。

北陸新幹線の開通を目前にした2010年から、「ユネスコ創造都市金沢」の魅力を県内外に発信しようと市内のアーティスト・工芸作家(以後作家)のアトリエや建築物を訪問する社会実験を60回以上実施してきた。

坂本 英之理事長、水野 雅男副理事長から金沢クリエイティブツアーとまちづくりについて伺った。



コースは、アンケート分析し専門家のモニタリングを受け、最後にスタッフがモニタリングツアーを行い設定される

現代アートが地域を変える

「2004年に『金沢21世紀美術館』がオープンしてから金沢のアートシーンが変わった。これまでの伝統工芸に新しいジャンル、現代アートが入ってきた。美術館建設時は、工芸王国でなぜ現代アートなのかと議論があったが、最終的に山出前市長が『常識を打ち破る』と決断を下した」と坂本さんは言う。

「市民に開かれた美術館」をコンセプトに開館し、国際的な展覧会の他に若手アーティストの作品展示、美術館と市民で造り上げるアート

プログラムで、13年たった今では、市民から「21美」と呼び親しまれている。

北陸新幹線開業による観光客の増加もあり、2016年度の年間入場者数は255万人(総合ユニコム「レジャー施設 集客ランキング 2017」[ミュージアム部門]全国2位)を記録している。



坂本理事長(右)と水野副理事

1980年代後半のバブル崩壊後、若い人の感覚が変わり、作品と観客との関係性が見直された。美術館に展示するだけでなく、今までアートと関係のなかったオルタナティブスペース(もう一つの場所)に、アートを見てもらうしかけをし、背景、場所との関係性、作家の美のコンセプトを総合的に見てもらうという動きだ。

まちづくりに現代アートを取り入れている例としては国際芸術祭が挙げられる。戦前から国・自治体を中心になって始めた「ヴェネチア・ビエンナーレ」*1、民間では「ドクメンタ」*2などがある。何十万という観客が、世界各地から訪れ、経済効果が生まれている。

日本では、北川フラム氏が総合ディレクターを務め、3年に1度開催される国際芸術祭がある。2000年から越後妻有(新潟県十日町市、津南町)を舞台に、アートを道しるべに里山を巡る「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」、2010年から瀬戸内海の12の島々を舞台

に繰り広げられる「瀬戸内国際芸術祭」が挙げられる。

瀬戸芸は、企画時には、何年かしたら止めるとたたみかたまで議論されていたが、100万人を超える来場者を集めた。芸術祭で訪れたのがきっかけで移住する人が急増し、小中学校が再び開かれ活気を取り戻していることでも話題になっている。

現代アートの祭典が経済効果、過疎地域の活性化につながる実証され、今年度は「北アルプス国際芸術祭」*3、「奥能登国際芸術祭」*4が加わった。

- *1 イタリア・ヴェネチアで1895年から2年に一度開催されている
- *2 ドイツ・カッセルで1895年から5年おきに開催されている。
- *3 大町市で6月4日から7月30日まで食とアートをテーマに開催された。
- *4 珠洲市で9月3日から10月22日まで「奥能登国際芸術祭 2017 - 最涯の芸術祭、美術の最先端」が開催されている。

■ 作家との会話から作品の背景を知る

カナダのソルトスプリング島では、1990年から毎年、約30のスタジオが公開される「スタジオツアー」が開催されている。マップやホームページで情報を得て、興味のある作家のスタジオを廻り、作家と会話を楽しみ、気に入った作品があれば購入もできる。水野さんは、スタジオツアーに参加し、いつか金沢でやってみようと思っていた。



スタジオツアーで作家から作品の説明を聞く

昨年、クリエイティブツアーの原点を確認するため、坂本さんと水野さんはソルトスプリング島を訪れ、「スタジオツアー」に参加した。約一週間、ある作家が運営するギャラリーに併設されたゲストハウスに滞在した。そのダイニングテーブルの上にあるオブジェが坂本さんはずっと気になっていた。宿泊最後の日、作品を購入した。「それはオブジェを手に入れただけ

でなく、この旅で訪れ、目にふれた一連の流れと作品が生まれた背景をいっしょに持ち帰ることができる。金沢に戻ってからも、その臨場感は続いている」と「場所性」が作品への愛着をより深いものにするという。

クリューは、スタッフが知り合いのアトリエや店を「友達を連れてきたよ」という感じで訪ね、作家が迎え入れる。なごやかな雰囲気の中で、作家は制作への情熱を話し、参加者は興味を持った作品について臆さず尋ね、作品の背景を感じることができるよう構築されている。



アトリエ訪問は作家の暮らしぶりがうかがえ、作品がより身近に感じられる



■ 金沢というまちの力で作家を育てる

坂本さんは「私が教える金沢美術工芸大学の学生の多くが卒業後、金沢に残っても長く続かず、高い家賃・狭い空間にもかかわらず情報・人脈がある首都圏に出て行く。

今、4割が高齢者という材木町で、住民といっしょになりまちづくりをやっている。空き家になった町家をアトリエに改築し移り住む作家も出てきた。制作するだけでなく、陶芸作家は昼、粘土教室を開き、仏師は夜アトリエの一部でバーを営み、まちは元気を取り戻している。彼らを見て金沢へきてくれる若者が増えるようなサポートが必要だ。

人と人のつながりが深い地方都市の特徴を活かしネットワーク化し、サポートできる土台をつくり、『金沢には何かある』、『金沢でやる』、『金沢で続ける』という人を増やし、金沢というまちのブランド力につなげていきたい」とクリューには金沢で世界に羽ばたく作家を育てるミッションがあると感じている。

水野さんは「アートは、まちに新しい風を吹かせる。『金沢は東京でやるより21美が近くにあり刺激がある』と金沢にアトリエを持ちたいと思う作家が出てきている。劇的にまちを変える力がある」と考えている。

■ ビジネスモデルの構築

現在、橋場町の「HATCHi金沢」発着で、16時に出発し、夕食までの2時間、普段入り込まない東山周辺の裏通りを縫うように歩き、金沢の街を眺望できるスポット、作家のアトリエ訪問が「まちあるき味見コース」の標準コースとなっている。



主計町界隈の地形、暮らしが感じられる坂を歩く

「クリツのニーズはある。アンケートでも参加者から作家と直接話しができたのが良かったという回答を得ている。意外にも金沢市内の方から、住んでいても初めて知ったことがあり感動したという意見が寄せられる。

プロモーションはホームページ、Facebook、HATCHi金沢にリーフレットを置いている。

まだ、採算が合うとは言い難いが、秋にはこの先進的なツアーに関心を寄せている観光学会の申込みもあり、それをきっかけに参加者も増えるのではないかと期待している。

コンテンツを増やし、グレードアップして更新し、ビジネスモデルを構築していきたいと、8月30日にかみつつみちように上堤町にオープンした「KUMU金沢」発着のスタディツアーを行い、長町やせせらぎ通りなどを巡るツアーの新しいコースの検討を始めた。

また、狭い路地が多い金沢をおしゃれな自転車者で巡るツアーの可能性も検証予定だ。



今後、海外からの参加者も増えそうだ



スタディツアーでせせらぎ通り界隈に気になるスポットを発見



HATCHi発着!
Kanazawa Creative Tour
ツアー

チェックインから夕食までの2時間、地元ガイドが案内する金沢のタイムスナップを体験してみませんか?
HATCHi周辺に点在するクリエイティブなスポットを巡り、ツアーの最後は夕暮れにひびく高麗菜を二品、鳥居渡や塩漬を堪能しながら、金沢の暮らしにまつく感動を体験できるツアーです。

日程: 2時間
料金: ¥3,000/人*2人~開催
予約: 3日前まで
集合: HATCHi金沢(金沢市橋場町3-10)
コース例: HATCHi金沢-カフェ、ギャラリー、ショップ-HATCHi金沢

まちあるき味見コース
Machi Aruki Mizumi Course
まちあるきコースは、金沢の文化スポットをめぐるガイドツアー。肉店や豆腐屋、味噌屋、和菓子屋、金沢の歴史や文化、作家のアトリエやショップを巡るコースです。作家の暮らしにまつく感動を体験できるコースです。

アトリエ探検コース
Artist Exploration Tour
冒険は入ることができない作家のアトリエを訪問、作品が生まれる空間の中で、作家本人とコミュニケーションできるのが魅力のコースです。作家の暮らしにまつく感動やこだわりから、金沢の暮らしの個性を体験することができます。

【ツアー申込先】
Inquiries
NPO 法人金沢クリエイティブツーリズム推進機構
http://www.kanazawacreativetourism.jp
Mail: kanazawacreativetourism@gmail.com



HATCHi金沢は仏壇店を改装したシェア型複合ホテル(地下にキッチンがあり宿泊者は料理し、交流もできる)

■ 金沢クリツに参加して

16時、HATCHi金沢をガイドして下さる上田 陽子さんと出発。上田さんは、ツアーのアートマネジメントを担当している。訪ねる作家、店の最新情報を収集し、参加者への事前アンケートからコースを選定してくれる。



上田陽子さんがデザインしたクリツアーロゴ、旗の色は加賀五彩が使われている



浅野川に架かる「梅ノ橋」の名前が金沢らしい

浅野川沿いを歩き、木造の「梅ノ橋」を渡り、ひがし茶屋街のメインストリートを眺めながら、献上加賀棒茶の茶房一笑に入る。

茶屋の面影が残る店舗2階では、無料の作品展が常時開催されている。観光客で賑わう茶屋街の喧噪をしぼし忘れ、陶芸作家、魚津 悠さんの作品を拝見した。



作家に作品、最近の活動について熱心にたずねる上田さん(右)



歴史を感じる東山の路地

茶房一笑を出て、初めて通る私には迷路のように思える細い小路、坂をどんどん歩き、金沢市内を一望できる卯辰山に着いた。歩いてきた道のりが見渡される。ここで1枚とカメラを手にすると、「金沢城も見えますよ」と言われた。浅野川沿いの古い家並み、林立するマンションに城下町金沢の今が分かる。



卯辰山から金沢市内を見渡す

東山のひがし茶屋街しか知らなかったの、先人の暮らしが感じられる高木靴商店がある通りには感動した。

江戸時代を彷彿させる店内の雰囲気とちょうど開催されていた「望月通陽展」の旧約聖書を題材にした版画が、とても不思議な空間と時間を演出していた。ご主人の「この建物を維持するのは大変だけれど、ここで、こういう作品に囲まれているのが好きなんだ」というお話しに、金沢は工芸を支える裾野が広いと改めて感じた。



東山で180年続く高木靴商店

活版印刷「ユートピアノ」の松永 紗耶加さんのアトリエでは、壁いっぱいにならぶ活字を見て、30年以上前、職場で使っていた和文タイプを思い出した。活字を苦労して探し、和紙が切れないよう打った記憶がよみがえってきた。

松永さんは、廃業する富山県の活版印刷所から活字を買い取り、金沢市で始めたそう。見せていただいた和紙の名刺から、依頼者と松永さんの想いが伝わってくる。



活版印刷の活字がならぶ「ユートピアノ」

2時間のツアーは、初めてお会いする作家やお店の方とお話し、作品だけでなく、その背景にあるものを自分なりに感じる事ができた。アートをとおして、その背景にあるまちのあり方、暮らし方を考えるきっかけにもなっている。

今回、金沢を訪ね外国人観光客、リノベーションしたおしゃれな店舗が多い事に気づいた。それは、金沢というまちの伝統文化を受け継ぎ暮らしている人達が、新しい風を入れながら未来へつなごうとする気概・誇りからくるのだろう。「奥深さ」は過去、現在、未来への連続があり初めて醸成される。

取材協力・写真提供

NPO法人金沢クリエイティブツーリズム推進機構

石川県金沢市青草町 88 番地

<https://ja-jp.facebook.com/KANAZAWAcretour/>

クリツアー問合せ・申込

✉ kanazawacreativetour@gmail.com

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

小国に生きる 小国を活かす 峠でつながる

NPO 法人 ここ掘れ和ん話ん探険隊 (山形県小国町)



参加者を案内する岡村さん(中央上)と舟山さん(中央上から2番目)

飯豊連峰と朝日連峰が眺望できる朴ノ木峠頂上

山形県南西部に位置する小国町は、清流荒川、名峰朝日連峰、飯豊連峰に囲まれた人口約8,000人の農山村。NPO法人ここ掘れ和ん話ん探険隊(以下:和ん話ん)*¹は、発足以来、「小国に生きる 小国を活かす」を掲げ、町の長所を地域で掘り起こし、話し合い、活性化につなげていこうと活動している。「小国の魅力は山。季節によって違う表情とその恵みを感じられる」と語る理事長の吉田 岳さん(48)と事務局長の加藤 喜一さん(75)からお話を伺った。

*1 平成14年11月小国町商工会のまちづくり事業の中で発足し、平成20年3月、NPO法人に移行。

■ 移住者と地元をつなぐ窓口

登山ガイドを生業とする吉田さんは、山形市出身。小さい頃から山に親しみ、大学では森林学を専攻した。卒業後、山村で自給自足の暮らしをし、まちづくりに関わりたいという想いから小国町に移り住んだ。

「20年前は、今のように移住者が歓迎されるような状況ではなく、いわゆるよそ者だった。小国山岳会に入り仲間ができ、町や森林組合から登山道の整備や造林作業の委託を受け生計の基盤を得た。人づてに他人の悪口は言わない、誹謗はしないというルールのもと、得意分野を活かし真剣にまちの活性化を議論する和ん話んの活動を知り参加した」と言う。

「全国青年会議所の理事として地域づくりをリードする人材を出すなど、会員の意識は高い。町はこうすべきだと発言することもあり、煙た

い存在だろうね」と加藤さんは苦笑しながら、「人口減少が進む中、町は若い人に移住してもらおうと都市部の大学生の視点で地域振興を考えてもらうプロジェクトを実施しているが、住民との交流は十分とはいえない。その後のフォローはまだ確立されていない。せっかく移住してきても、地域の習慣、文化に馴染めず断念したのでは残念だ」と今後、移住者と地元をつなぐ役割を担っていきたいと考えている。



加藤事務局長と吉田理事長(右)

■ 越後米沢街道・十三峠で交流

和ん話んは、任意団体当時から、山形県置賜地方と新潟県下越地方を結ぶ「越後米沢街道・十三峠」*²を地域資源として保全・整備し、地域づくりにつなげようという山形県川西町、飯豊町、小国町、新潟県関川村にある団体組織で構成される交流会に関わってきた。現在は事務局を担当し、ホームページで各地域の観光資源やイベントなどの情報発信を行っている。

*2 文化庁選定「歴史の道百選」(平成8年)、日本風景街道(平成20年)登録



交流会ホームページ

昨年開催された「とうほく街道会議 十三峠交流会から置賜・岩船の明日を考える」では実行委員会の事務局を務め、東北各地の活動団体と交流を深めた。

地域の活性化は、まず住民が自ら地域を知り、行動することから始まるとの考えから、萱野峠に残る敷石を町内外のボランティアや地元の小学生などで掘り起こす「萱野峠敷石掘れ惚れ探検隊」を開催してきた。



掘り起こされた萱野峠の敷石道

交流会事務局運営の実績から、平成24年度からは小国町の委託を受け、森林体験活動の企画・コーディネートを行っている。

中でも、毎年、4回に分けて十三峠を歩く「越後米沢街道・十三峠トレッキング」は、街道の歴史、峠からの絶景、森林浴、草花などが楽しめる人気イベントだ。小国町周辺の山形市、南陽市、米沢市、新潟市、新潟県下越地域などから毎回30人ほど集まる。全コース踏破すると賞状と記念品がもらえる。

和ん話んの会員で、「黒沢峠敷石保存会」事務局長も務める岡村 俊春さんが街道の歴史、森林インストラクターの資格を持つ舟山 功さんが街道の草花や樹木を案内してくれる。

参加者は興味に合わせ自然の中を歩く開放感から、すぐに打ち解け話しがはずみ「また会い

ましょう」と挨拶を交わし帰路につく。リピーターも多いそうだ。

■ 連携し新しい事業をつくる

「交流会の事務局をやり、改めて和ん話んのような組織が必要とされていることが分かった。街道が使われていた頃のように沿線の集落が交流し、イベント開催時には助け合える関係をコーディネートし、新しい事業を掘り起こしていきたい。

飯豊連峰は稜線に山小屋などの人工物が少ない。あるのは雪渓。1,800 m、全て自分で装備して登る。他に類がない奥深さに魅せられる人が多い。スノートレッキング、残雪期のツアーも人気がある。

森林体験活動はアンケートを取り、分析し、町に報告書を提出している。しかし毎年、同内容で委託される。参加者に会



雪のテーブルを囲んだ昼食が楽しめるスノートレッキング

いニーズを把握している和ん話んを信じ、もう少し任せてもらえたら、より魅力的な事業が展開できると思う」と吉田さんは町の理解・変化を期待している。同時に「会員が高齢化し活動が衰退しないよう地域づくりに参加したいという若い会員を増やし、地に足がついた活動ができるよう事務局体制を整えていきたい」と力を込めた。

来年は、英国の女性旅行家イザベラ・バードが明治11(1878)年に十三峠を越えてから140年という節目を迎える。バードが歩いた7月11日から13日、2泊3日で、同じコースを歩き彼女の気持の一端に触れてみようという「イザベラ・バード in 十三峠」は、和ん話んがこの地域の自然、暮らしの豊かさを世界に発信する絶好の機会になるだろう。

取材協力：NPO 法人ここ掘れ和ん話ん探検隊

山形県西置賜郡小国町新原 124

TEL/FAX 0238-62-5955

<http://mount13.web.fc2.com/index.html>

米粉のまち胎内でわいわい(新潟県胎内市)

日本で最初に米粉専用の製粉工場ができた胎内市。「米粉グルメ」を紹介したマップ、レシピも充実している。食べ歩きで見つけたお気に入りの、家で作ってみるのも楽しそうだ。



米粉パンと米粉の焼きカレー



胎内米粉の珈琲ロール



ぐれのもち米粉カレー

■ 微細米粉発祥の地

新潟県の北東部に位置する胎内市は、2005年、旧中条町と旧黒川村が合併して誕生した。胎内川を中心に形成された市域は東西に細長く、中流部には肥沃な扇状地が広がっている。

米粉への取組みは、1998年、旧黒川村に日本で最初の微細製粉米粉専用の製粉工場ができた。新潟県が特許を持つ微細製粉技術を用いて、従来の米粉より粒子が細かくタンパク質や油脂類と親和性がある粉が開発された。

この技術によって、パン工場の機械で米粉パンがつくられるようになり、小麦粉の代替としてパンや麺、洋菓子への使用が可能となった。

■ ご当地グルメ「べえべえ」

胎内市商工観光課観光振興係主任の坂上徳義さかうえのりよしさんは、「約20年経ち、市内には、米粉グルメやスイーツを提供するお店が数多くでき、『食べ歩きマップ』が作成されている。毎年秋に行う『米粉フェスタ』の出店数も年々増え、昨年は36店舗、今年は約40店舗が出店予定だ。

米粉グルメNo.1を決める『米-1グランプリ』は来場者の投票で決まるのでみな熱くなる。



米粉フェスタ(昨年は2日間で来場者12,000人)

来場者は市内が約6割だが、新発田市、村上市、新潟市などの下越地域のほかに山形県などの県外客も訪れる。『いろいろな米粉グルメを味わえた』、『おいしかった』と好評だ。

お店の熱意で、外食で米粉料理を楽しむ人は増えている。しかし、米粉を家庭で小麦粉の代わりに料理に使うという習慣は、なかなか定着しないのが課題だという。

そこで市は、平成22年度、市内の幅広い主体が参加する「たいない『食』のわいわい会議」を立ち上げ、ご当地グルメ「べえべえ」を開発し、体験教室、レシピで普及に努めている。

「べえべえ」は、米粉と水、塩、砂糖で作った生地、肉や野菜、あんこ、フルーツ、ジャムなど自分の好きな具材を巻いて簡単に作ることができる。

わいわい会議は、米粉で地域活性化を継続的に展開するため、イベント等に「米粉かふえ」を出店し、米粉の魅力を発信しFacebookでも紹介している。

米粉の魅力として、「米粉で使ったパンや麺に、もちもちとした食感があるのは、米に含まれる粘り成分、アミロペクチンの作用です。



また、揚げたり、高温で直接焼いたりすると、サクサクとした食感になります。さらに、油を吸いにくいので、揚げ物の衣に使えばカロリーを抑えられます」などうれしい情報も掲載されている。

ベえべえの作りかた

「ベえべえ」は米粉と水、塩と砂糖だけでかんたんに作れます。

材料(5人分)
 米粉………110g
 水………220cc
 塩………2g
 砂糖………2g
 お好みの揚げ油

- ① 鍋に米粉10g、水100cc、塩、砂糖を入れ、火にかけてとろみをつけます。
- ② おいしいべえべえをつくらポイント！ 米の粒に移して冷まします。こうすることで、もちもちとした食感が出来ます。
- ③ 米粉100gと水120ccを混ぜて、よく混ぜます。
- ④ テフロン加工のフライパンにサラダ油をうすくひいてふきとり、生地を焼きます。生地が動くようになったら、うら返します。
- ⑤ お好みの具を巻いてできあがり！

たいない「食」のわいわい会議
 〒954-8503 新潟県胎内市新和町1-10号
 TEL: 0254-43-6112 FAX: 0254-43-7992
 E-mail: kankou@city.tainai.niigata.jp

米粉のまち たいないブログ URL <http://tainai-komeko.blogto.jp/>

コーヒーを練り込んだ米粉100%の生地に、コーヒーバタークリームを巻き込んだロールケーキは、専門店ならではの贅沢な味が楽しめる。

「昨年の米粉フェスタ後に提供を始めたので、お店にいらして初めてロールケーキを知ったと喜んでいただいています」。コーヒーのほろ苦さが感じられるもちりした米粉の生地と洋酒が入ったバタークリームが絶妙で、おみやげにほしいというお客様もいるそうだ。パンは、米粉100%だとうまく膨らまないで、現在は研究中。



きのと小学校5年生のふるさと体験学習で米粉プリン（もちいし）の作り方を教える近藤さん、一人で作ると子供たちの反応も上々



米粉の普及のためつくられたレシピ集、胎内市観光交流センターで米粉を購入するともらえる



■ 米粉のまちを支える「米粉かふえ」

珈琲舎ぐれ代表、近藤美枝子さんは珈琲専門店を開店して3年半になる。米粉は知っていたが、市が米粉でまちづくりを進めていることは知らなかった。せっきゃく、胎内にオープンしたのだから米粉を使った料理を提供したい、米粉振興の一翼を担いたいとわいわい会議に入会し活動している。

カレーのルーにもち米粉を入れとろみを出した「ぐれのもち米粉カレー」、このカレーに生クリームとチーズを載せて焼いた焼きカレーは人気がある。他にシチュー、ハンバーグなどがある。

今春から、珈琲専門店の特徴を活かしたスイーツ「胎内米粉の珈琲ロール」を出している。

また、「米粉かふえプロジェクト」の一員である近藤さんは、小学校で米粉料理を教えることもある。「子供たちは、米粉を学び親しんでいるので、これから自然に料理に取り入れていくと思いますよ」と明るく応え、「米粉のまち」で胎内が活性化するのを楽しんでいる。

胎内市は、毎月4日を「米粉の日」に定め、市民に関心を持ってもらうようなイベントを企画している。

市民が自慢の米粉料理を持ち寄り、胎内の食材でわいわいおしゃべりをする日になったら素敵だなと思った。

取材協力

胎内市 商工観光課

新潟県胎内市新和町 2-10
 電話：0254-43-6112
<http://www.city.tainai.niigata.jp/>

珈琲舎ぐれ

新潟県胎内市西栄町 2-35
 電話：0254-20-8027
<https://www.facebook.com/kohisya.gure>



伝 言 板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場等	内 容	問合せ先
信濃川・大河津分水 写真コンテスト	応募締切 10月13日(金)		母なる大地越後平野に恵みをもたらす信濃川、治水の要として暮らしを守る大河津分水の魅力を身近に感じられる写真を募集 ●審査発表 11月上旬 ●表彰式 12月上旬 ●展示会 12月～3月	北陸地方整備局 信濃川河川事務所 総務課 TEL:0258-32-3020
第28回 土木フェスティバル ～たのしく知ろう どぼくのいろいろ～	10月15日(日) 9:30～16:30	長岡市 国営越後丘陵公園	【屋外展示】現場で働く車の展示や体験等 【屋内会場】土木事業のパネルや模型の展示、クイズラリー	長岡市 土木部 土木政策調整課 TEL:0258-39-2307
第24回 大里峠越交流会	10月15日(日)	新潟・山形県 を結ぶ旧越後米沢街道十三峠の一つ「大里峠」	旧街道を歩き往時を偲び、周辺の豊かな自然環境や歴史とふれあう。大里鍋を囲んでの交流会	小国町 地域整備課 TEL:0238-62-2431 【申込締切】 10月12日(木)
第16回 応用生態工学会 北信越現地ワーク ショップ in 石川 流域の連続性の回復 ～小さな自然再生から 流域の地域再生を 目指して～	10月20日(金) 10:30～17:00	金沢市 IT ビジネス プラザ武蔵	【記念講演】 「応用生態工学の20年」 辻本 哲郎氏(応用生態工学会会長) 【基調講演】 「水辺の小さな自然再生に できること・期待されること」 原田 守啓氏(岐阜大学 准教授) 【講演】5題 【総合討論】	応用生態工学会 金沢事務局 (株)国土開発セン ター 環境1部内) TEL:076-274-8817 【申込締切】 10月6日(金)
平成29年度 建設分野の新技术 ・新工法の報告会 「建設技術報告会」	11月28日(火) 9:00～16:30	新潟市 朱鷺メッセ	【技術報告】10:50～16:10 【基調講演】9:40～10:40 「生産性向上のカギはこれだ!」 杉浦 伸哉氏 (株)大林組 土木本部本部長室 情報技術推進課長)	北陸地方建設事業推 進協議会 平成29年度 「建設技術報告会」 実行委員会事務局 (北陸技術事務所) TEL:025-231-1281 FAX:025-231-1283
防災講演会 - 西山 幸治氏を 迎えて -	11月29日(水) 15:15～17:00	新潟市 新潟東映ホテル	演題:「災害の教訓と対策」	(一社)北陸地域づ くり協会 企画部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205
地域の明日を 考える講演会	12月8日(金) 14:00～15:30	新潟市 アートホテル 新潟駅前	講師:堀 繁氏 (東京大学 アジア生物資源環境研究 センター長、教授)	(一社)北陸地域づ くり協会 企画部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205

編集後記

今号は、地域の偉人、インフラ、街道、アート、米粉をテーマに行われている地域づくりを紹介した。改めて「直接会って話す」、「行って見る」機会を、多くの人が望んでいることが分かった。

訪ねることで、ネットでは分からない魅力や実情にふれ、共感した人や地域を応援したいという気持ちも生まれる。これからのまちづくりには、住民がつくったコンセプトに同感する他地域の人がいっしょになって育て上げていく視点も必要だよ。 (事務局)

地域づくり in ほくりく 第14号

発行 平成29年10月1日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025)381-1160
FAX (025)383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>